

滿洲土木學會の創立に際し

名譽會員 直木倫太郎*

滿洲土木學會が今日茲に創立を見ましたことは洵に御同慶に堪へませぬ。

これ一に在滿土木技術家が最近如何に増加しつつあるか、即ち我滿洲の土木事業が昨今如何に多方面への活躍を敢てしつつあるかを物語るものであります。然かも其の間熱心なる有志諸君の御盡力により、日本の土木學會を動かし、緊密不可分の關係に於てその積極的支援を得るに成功し斯くて我滿洲の土木界に一元的な研究機關を創設し得たのであり、その多大の御努力に對し深く感謝せざるを得ませぬ。

さて茲に何よりも先つ我々は我等の目前に時々刻々に開曠して止まざる世界的空前の大轉換期の、その隈まぐるしき諸々の大動亂に直面し且つ具さにこれを味ふに於て、御互が能くぞ斯くも又と得難き最も生甲斐ある時代に生れ合せたことか、わけても我日滿兩國の豪快極まる大飛躍大進展の眞直中に生れて、具さに之れを呼吸し之れに感鳴し得ることの、その限りなき幸福こそは只々隨喜感激の外ありますまひ。

わけても茲に此の時代を特に最も深く感激し最も生甲斐を覺ゆるものは、實に我等技術家であります。私は學校生活を終へてからの過去 40 年の技術生活に於て、今日見るが如き斯かる技術への社會的尊重を未だ曾て呼吸したることはない、否寧ろ技術家たることの不平不満に常に悶へ難みつつこれを諦むるより外なかつたのであります。然かも圖らずも茲に世界狀勢の歴史的轉換と共に突如として、科學尊重、技術重用への一大變轉を國家的に將た全面的に理解し認識せしむるに至つたことこそ、之れをしも何と喜はざるを得ませう、それは我々技術家としては實に痛快至極のことである。が、それもその筈である、今や世界を擧げての國家總力戰、高度國防國家制度の完遂への最中である。國民の誰もが各自の立場に

於て國家奉仕の爲に懸命の努力を捧ぐるは固より、わけても東亞建設の聖業の爲には、そこに科學と技術の躍進こそはその重大要素たるのであり。最近日本政府發表の基本國策なり又其の立案中の上にも歴々としてその意味が示され、民間も亦能くこれと呼應していきみ立ちつつあるのであります。即ち斯くして我國の科學が、技術が始めて社會の活舞台の上に輝やかな「フットライト」を浴びて、天晴れ時代の立役者として立振舞ふに至つたのであります。私共は以前から常に斯くあるべきの當然さを飽迄主張し確信しつつも、今日まで遂に其の機を捉へ得ざりしのみか寧ろ不平と煩悶に終始したのであつた。

そは何か故に然りしかを一應返つて見ますに昔は社會生活上必要の器材即ち「物」が洵に少くて濟み且つその取扱ひ方も頗る簡單であつた。水の流るゝを見ては「逝く者は斯くの如きか晝夜を分てず」と只嗟歎するのみで足りた、誰かこれから水力電氣を採るなどの必要を感じようぞ。「桃李もの言はず蹊自ら道を成す」のであつて、そこに自動車もなければ舗裝の必要もない。木は材木として使へばよいのでパルプを取るなどの必要もなく、石炭は燃料として掘出せば足るので、人造石油の工夫に想到する必要がない。さればこそ「物」を相手の學問こそは全く尊ばれず、唯「人」を相手の學問、「人」と「人」との交渉の學問、人間同志の「社會現象」の研究が最も重んぜらるゝ半面に於て、「物」では全くものが言へなかつたのである。「物」の研究に興味を持つ者はこれがホントの「物好き」なのであつた。尊敬どころか寧ろ外道扱ひ、狂人扱ひであつた、その氣持が一般的に染み込んだるまゝ今日にまで持續けられ來つたのである。

茲に無駄言を挿むやうで相濟まぬが、その面白い例は彼の風來山人平賀源内にある。今から約 160 年前、元祿から天明へかけての徳川文化の最中に於て、彼は原野

苦心電氣の器械を工夫し、暗室に火花を散らせたり、蒸盤の上の人を懸懸させたりしたのみならず、その當時に於て彼は武藏秩父の郷に石綿を發見し、火に燃えさる布を織り上げて釜敷として賣り出したり、江戸の湯島に物産會とて今の展覽會を開催すること5回、その出品2,000種、出品者30ヶ國に及ぶのみか、その優秀品目を圖解し説明して一書に編述したり、又は砂糖の栽培法を著述し、且つ大阪の豪商中島屋喜四郎に説き備後の地味類るこれに適するを以て栽培を實行せしめて巨利を博せしめたり、又九州天草島の土質に着眼し幕府に建白して外國向け輸出陶器を製作、長崎表にて外國人相手にこれを賣出さんとしたり、或は甲斐の金山を調査し、或は仙臺候の依頼で仙臺藩内の鐵山を調査したり、又は當時もてはやされし源内櫛、自惚鏡を賣出したり、金唐革、紅革の工夫を遂げ又は藥草藥物の研究に従ひ、その最後には伊豆、相模の島々の開發を建白するなど。凡そ斯くの如きは今日ならば誠に立派な技術家とも見るべきものが、世間からは「手品師、大山師の親方」と嘲けられ、その遺願なき悲憤は彼をして「放屁論」其他幾多の隨筆に於てその鬱憤を爆發させたものゝ、却てその死後までも「誠の學問の邪魔を爲せし當代俗學の元祖」とか「實に才子の誓めならん」とまで「鳩溪實記」に書立てらるゝ始末。これでは何うして技術が伸びる餘地があらうか。

次に明治時代に入つては、これは皆様よく御存じの通りで敢て多言を要せぬが、極最近までは所謂自由經濟の時代、營利本位の嵐に吹捲られて居たので、技術上必要な總ての機械も製品もパテントも、そして廉いもの新しいものが、次から次へと自由に世界の何處からでも手に入るからには、其の間何處に我等技術家の獨創の見地を發揮し、實地に之れを具現し進展せしむる術があらう、まして研究費實驗費の如きまだるき工作に誰あつてか耳を貸さう。國家も、大會社も、まして箇人の誰が何程の力を入れやう。

斯くて技術は何時までも外國の技術に追隨するの外なく、單に民間企業の利益の爲の手段として道具として屈從するの外なかつたと同時に、我土木技術の如く専ら國家の公益事業の爲に終始する處の専門部門とて、亦自

ら夫等一般技術界の捲添へを喰つて、恰も國家行政上の手足としてのみ役立つものゝ如くに見做され、爲に極めて不快な、地味な、陰鬱な立場に隠忍するの外なかつたのである。

然かも此の間、我等が先輩の努力と働きこそは實に大きい、斯かる氣まづき不快極まる時代の流れに忍従しつゝも、黙々として只管その志す處の道に一意専念、努力の限りを盡し來つたのである。今日我々が斯くも目前果敢しくも目覺ましき大舞台に直面して、即座にこの新時代の要求に即應して起ち得るだけの覺悟と用意を自信し能ふ所以のものは、全く我先輩の働き努力の賜物である。

技術は常に大きな一つの繋がりである。先輩の努力なくして我等の働きは無く、我等の苦心なくしては又將來の技術は活きぬのである。

而してこの大きな繋がりをつける所のものが日本の土木學會である。これこそ我等が専門の學術的研究の中心機關である。その研究は常に新しく、常に深く、屢々として押進められつゝのである。而已ならず我等諸先輩の業績の大半も亦常に此の機關によりて尊く記録されてるのである。之等研究の経路を尋ね且つその不斷の新群味に關るゝことなくしては我等が今後志す處の大體での大活動の舞臺に於て不斷の發刺たる生氣を點ずることは出來ないのである。即ち斯かる一元的な學術研究機關を専門上の一大據點とすることによつてのみ、我等は飽迄時代の要求を背負ふて邁進し能ふのである。

綜合技術の必要が最近大に説かれつゝあるが、然かもその綜合的活動の上に多くの權威を持ち、多くを主張し多くを行動し、且つ多くを貢献せんが爲には、先づ飽迄も自己の専門に忠實であらねばならない、飽迄も専門の據點に立ちて然る上にこそ更に時代の要求たる綜合技術の妙用に參畫せねばならぬのである。外には飽迄高度國防の線に沿ひ、内には飽迄誠私奉公の線に沿ひ、飽迄端々しく「我等の時代」を進展せしめねばならぬのである。過去のあの陰鬱極まる舞臺裏で、大道具小道具を持運び何時も他の人々の爲に都合よき舞臺捲へを爲すために、したたか熱汗を搾つたあの醒れたる努力、認められざる